

石川県埋蔵文化財情報

第 26 号

巻頭図版 (丸の内7番遺跡、道村B遺跡)

平成22年度の発掘調査から……………所長 三浦 純夫… (1)

発掘調査略報

大泊A遺跡 (七尾市) …………… (4)

七尾城跡 (七尾市) …………… (6)

丸の内7番遺跡 (金沢市) …………… (8)

小立野ユミノマチ遺跡 (金沢市) …………… (10)

八日市D遺跡 (金沢市) …………… (12)

横江D遺跡 (白山市) …………… (14)

北安田南遺跡 (白山市) …………… (16)

道村B遺跡 (白山市) …………… (18)

平成22年度下半期の出土品整理作業…………… (22)

調査研究

弥生住居の想定復元2……………久田正弘… (25)

畝田・寺中遺跡ほか2遺跡 (畝田西遺跡群) 出土第1号木簡補遺……………和田龍介… (37)

畝田・寺中遺跡ほか2遺跡 (畝田西遺跡群) の古代「方形溝」について……………浜崎悟司… (41)

2011年9月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

丸の内7番遺跡

1・2・4区第1面の完掘状況透景（南東から）

金沢城跡の北東側を区画する白鳥堀に面した金沢城下町の遺跡であり、平成23年4月からは金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）へと遺跡名が変更になっている。調査区は、金沢地方・家庭・簡易裁判所の敷地内に位置しており、江戸時代の城下町絵図には加賀藩の公事場（現在の裁判所）や岡嶋備中・多賀典膳など有力武士の武家屋敷が描かれている。

調査の結果、複数の遺構面を確認し、最大4面の調査を行った。室町時代及び江戸時代前期以降の礎石建物や掘立柱建物の他に、石組の池状遺構や水路状遺構、桶と竹樋を用いた導水管路状遺構、井戸、石敷、方形区画、水溜状遺構、道路状遺構、大型の土坑や溝など多くの遺構が見つかり、水路状遺構内には園地の景石と考えられる大型の石材も検出されている。

遺物は江戸時代前期頃を中心に、中世後半～近世後半にかけての土師器や陶磁器をはじめ、瓦、土製品、砥石や石臼などの石製品、五輪塔、煙管や鉄釘などの金属製品、銅銭、鉄滓、下駄や箸などの木製品、曲物や漆器椀などの漆製品と、多様な遺物が多く出土している。

1・2区第3面検出の石組池状遺構全景（東上から）

調査区の大部分は、武家屋敷に付随する庭園であったと考えられ、白鳥堀から水を引いていた可能性がある水路状遺構や周囲を石で護岸された石組の池状遺構、石組井戸などが確認されている。今回1・2区第3面で検出した大型で深さのある石組の池状遺構は、長さ17m以上、幅7m以上、深さ約1mを測るが、江戸時代前期以降数次の改修を受けており、江戸時代後期には小さく浅いものへと変化する。



1・2・4区第1面完掘状況の遠景（南東から）



1・2区第3面の石組池状遺構全景（東上から）

写真解説

道村 B 遺跡

全景（南から）

手取川の扇状地に立地しており、海岸までは約 2km ほどの距離にある。3 本の旧河川に挟まれた二つの島状微高地上に、古墳時代末から奈良・平安時代の集落が営まれていた。

竪穴建物と掘立柱建物

古墳時代末から奈良時代を主とする遺構面では、建物同士が重複して検出されており、遺構密度が高い。



全景（南から）



竪穴建物と掘立柱建物

平成 22 年度の発掘調査から

所 長 三 浦 純 夫

平成 22 年度は、石川県教育委員会から 15 件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの件数は、国土交通省が 2 件、鉄道・運輸支援機構が 10 件、最高裁判所が 1 件、県土木部が 1 件、県教育委員会が 1 件である。

本号では、22 年度に石川県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の概要を報告し（前号で報告した遺跡は除く）、あわせて石川県金沢城調査研究所および市・町の発掘調査概要も紹介する。

1 石川県埋蔵文化財センターが実施した調査

大泊 A 遺跡（七尾市）は平成 20 年度からの継続調査で、これまでは海岸近くの調査箇所では製塩遺構を確認したが、22 年度は調査箇所が山裾で、縄文時代の土坑、古代の土坑・川、中世の掘立柱建物を確認した。

七尾城跡（七尾市）では大手道周辺の調査を行い、道に面した武家屋敷が明らかになった。緩斜面に石垣を築いて造成しており、間口は 12m である。シッケ地区で発掘された職人の屋敷の間口が 5m と 8m であるから、武家の屋敷がかなり広いことがわかる。屋敷内から、貯蔵穴や井戸が検出され、陶磁器、土師器、漆器、硯、茶臼など多様な生活道具が出ている。

丸の内 7 番遺跡（金沢市）は中世・近世の遺跡で、中世では掘立柱建物、石組井戸、土坑などを確認し、近世では礎石建物、石組みの池、水路、井戸、石敷遺構、廃棄物の土坑などを確認した。池は武家屋敷の裏庭に造られたものであろう。

小立野ユミノマチ遺跡（金沢市）は、小立野台地に営まれた近世遺跡である。天徳院の北に位置しており、文化 14 年に写された「金沢城下大絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）では、調査箇所には「横山三郎下屋敷」と「射場」記されている。調査の結果、掘立柱建物、建物群を区画する溝、大型土坑、畠作用の溝などを検出した。建物群を区画する溝のひとつは東西約 18m、南北約 40m である。大型土坑は、土取用の穴とみられ、階段が設けられたものもある。出土遺物には、陶磁器のほか幕末の「ミニエー弾」が数十個ある。これは、加賀藩が幕末に弓から銃への転換を図ったことを示す重要な遺物である。

八日市 D 遺跡（金沢市）では奈良・平安時代の集落を確認した。奈良時代は堅穴建物、平安時代になると掘立柱建物へと変化している。

横江 D 遺跡（白山市）は弥生時代と中世の集落である。弥生時代では、後期後半の堅穴建物や川を確認し、中世は掘立柱建物、溝などを検出した。

北安田南遺跡（白山市）では弥生時代後期～古墳時代前期、奈良・平安時代、鎌倉時代の三時期の集落を確認した。弥生時代後期～古墳時代前期では、堅穴建物、掘立柱建物などを検出し、奈良・平安時代では、掘立柱建物や畠作用の溝を確認した。鎌倉時代では、掘立柱建物を検出した。いずれの時代も建物は散在しており、手取川扇状地扇端部における集落形成の様相が明らかになった。

道村 B 遺跡（白山市）は、弥生時代から平安時代まで続く集落で、弥生時代の遺構は土坑のみであるが、古墳時代、奈良・平安時代は堅穴建物、掘立柱建物を確認している。出土遺物には、金銅製の耳飾りや和同開珎が出ています。この集落は奈良時代以降二度にわたって洪水に見舞われているが、11

世紀には再建されている。

2 石川県金沢城調査研究所が実施した調査

金沢城の復元・整備のための確認調査が続いている。橋爪門は、「二の門」と「枳形」を復元するための調査を実施し、添柱痕跡、銅柱・鏡柱の礎石根固め、石組溝、石組拵などを確認した。

玉泉院丸跡では、庭園の整備計画策定のため平成20年度から調査を進めている。玉泉丸庭園は、寛永11年(1634)に加賀藩三代藩主前田利常が京都から庭師を招いて作庭したと伝えられる回遊式庭園である。22年度は、池の範囲や岸辺の構造確認、導水に関わる遺構の確認を目的とし、「段落ちの滝」の石組、護岸石組などを確認した。

3 市・町が実施した調査

能登町は、松波城跡庭園の整備に関わる枯山水遺構の発掘を行った。枯山水の主体をなす石組み遺構は、扁平な石を敷き詰め、景石を配したもので、15世紀後半から16世紀の前半の築造と判断された。

金沢市では、直江遺跡群の継続調査が行われ、直江北遺跡では縄文時代晩期の川跡、弥生時代中期・後期、古墳時代前期の溝や土坑が検出された。大友遺跡群の調査も行われ、弥生時代から平安時代の集落で、建物のほか川跡が検出され、大友A遺跡では舟の部材が出土した。出雲じいさま遺跡は古墳時代前期の玉作集落で、石銅の剣貫円盤、合子、勾玉、管玉のほか、玉原石、剥片が出土した。

近世遺跡の調査では、加賀藩第四代藩主前田光高の墓地在注目される。小立野の天徳院田境内、現在の小立野小学校敷地にあるもので、堀をもつ大規模な近世大名墓である。昭和27年に野田山に改葬されているが、石垣をもつ堀が良好に遺存している。堀の幅は325m、深さは1.25mで、墓地の規模は東西45m、南北50mである。これは、近世墓としては県内最大で、加賀藩内では高岡市にある国指定史跡前田利長墓に次ぐものである。このほか、加賀藩の火薬製造所である土清水煙硝蔵跡や金沢城西外惣構跡の継続調査が行われた。

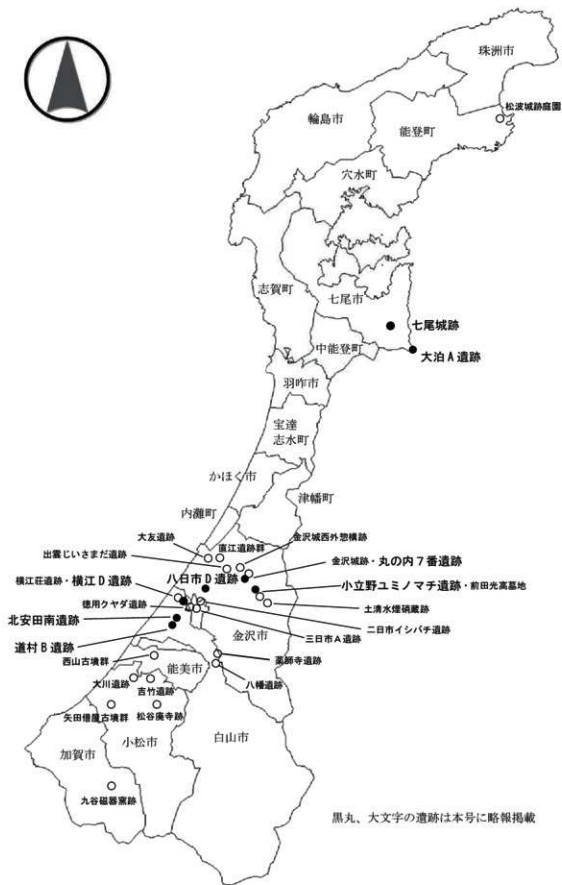
野々市町は、土地区画整理事業にともない二日市イシバチ遺跡、三日市A遺跡、徳用クヤダ遺跡とくようくやだの調査を行った。二日市イシバチ遺跡では、弥生時代後期に始まり、中世まで続く集落で、竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。三日市A遺跡、徳用クヤダ遺跡では弥生時代の竪穴建物、中世の掘立柱建物が検出された。

白山市は、横江荘遺跡で「郡庁」と推定される区画施設の確認調査を行なった。八幡遺跡は、鶴来地区に所在する古代遺跡で、11世紀末の掘立柱建物が確認された。また、八幡遺跡の北方にある薬師寺遺跡では、堀とその内側の石敷が検出された。

能美市は、西山古墳群の確認調査を行い、西尾根で新たに2基の円墳を発見した。

小松市は、大川遺跡、吉竹遺跡、松谷庵寺跡、矢田借屋古墳群の調査を行った。大川遺跡では近世の町屋と寺院跡が確認された。町屋は北国街道沿いに6区画検出された。

加賀市は、九谷磁器窯跡の整備にともなう調査を実施し、吉田窯跡の前面と「朱田」の確認を行った。



関係遺跡の位置

おおとまり
大泊 A 遺跡

所在地 七尾市大泊町地内

調査面積 1,100㎡

調査期間 平成 22 年 9 月 27 日～同年 11 月 29 日

調査担当 空 良寛、木原伊織



遺跡位置図 (S=1/25,000)



総柱型掘立柱建物



建物柱穴断面



川跡完掘状況 (北から)

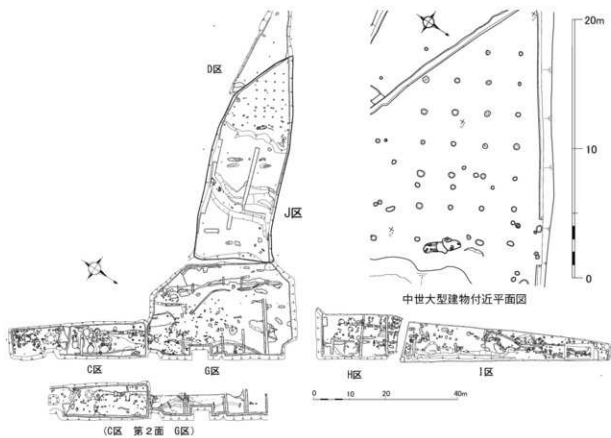
大泊 A 遺跡は、七尾市の南東端、富山県氷見市と市境を接した七尾市大泊町地内に所在する。一帯は石動山系低丘陵と日本海が近接する平地の少ない地域で、当遺跡は銚谷川河口部南側に形成された僅かな平地部分に立地する。

発掘調査は、一般国道 470 号能越自動車道（七尾氷見道路）建設に伴い、平成 20・21 年度の 2 年にわたり実施している。過去 2 回の調査では、古代～中世の製塩遺跡が確認されており、製塩炉や製塩土器が多く確認されている。

第 3 次となる今回の調査は 1,100㎡（J 区）を対象に調査を行った。調査区西端の平坦地では、中世の掘立柱建物を 2 棟確認し、うち 1 棟は東西 6 間、南北 3 間、柱間 2.4m の規模であった。

調査区中央部では南から北に向かって流れる幅約 7m、深さ約 1.2m の川跡を検出し、縄文時代の土器、石器、古墳時代の鉄器、古代の製塩土器、土師器、須恵器、木製品が出土した。左岸西側斜面では縄文時代の楕円形土坑 1 基、古代の楕円形土坑 2 基を検出した。

今回の調査では古代の遺構密度は薄く、山側に展開する中世の大規模な総柱型掘立柱建物の存在が注目される。（木原伊織）



大泊 A 遺跡平面図 (部分)



J区全景

七尾城跡

所在地 七尾市古城町地内

調査面積 970㎡

調査期間 平成22年9月27日～平成23年1月5日

調査担当 谷内明央 北村啓悟



遺跡の位置 (S-1/25,000)



石垣で区画された屋敷地 (北から)



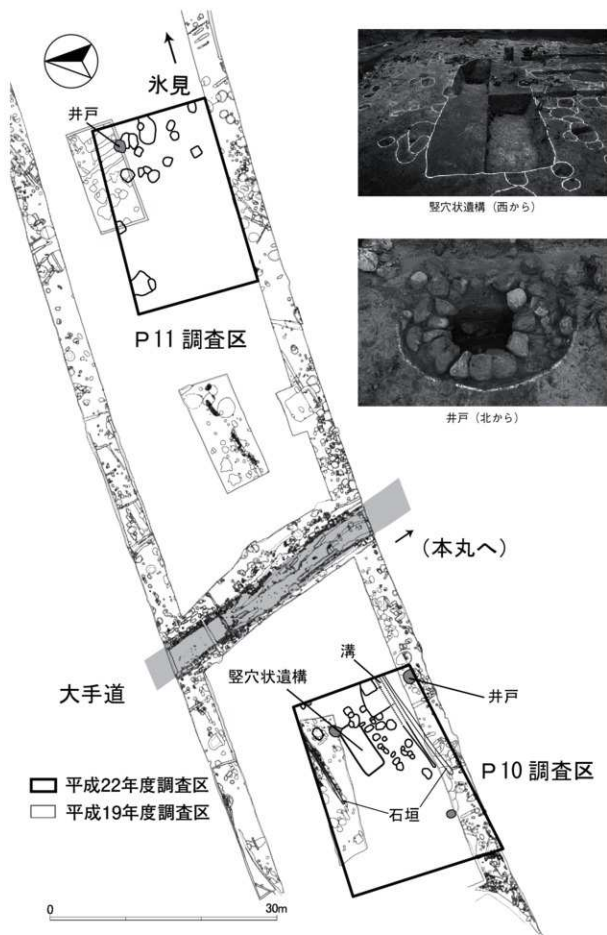
石垣 (北から)

調査成果の要点

- ・中世の集落跡を確認した。
- ・平行する2列の石垣で区画された屋敷地を確認し、堅穴状遺構や石組みの井戸などを検出した。
- ・16世紀の土師器、越前・瀬戸・美濃、中国産磁器、硯、石臼などが出土した。

七尾城は戦国大名の能登畠山氏が16世紀に築いた山城である。山上の要害と山麓に広大な城下町をもち、能登の政治・文化の拠点として発展をとげたが、天正5年(1577)の上杉謙信の攻略で落城し、天正9年(1581)には織田信長から能登を与えられた前田利家の支配下となった。七尾城跡の調査は今年度で6年目となる。平成17～19年度の調査では木落川と庄津川に挟まれた城下町の中央部を発掘し、城下の防御線となる総構の堀、本丸へ向かう大手道と屋敷地、鍛冶や染物などの職人居住を裏付ける町屋跡を確認した。平成20・21年度の調査では庄津川の西側で多くの掘立柱建物や石組井戸を発掘し、城下町の広がりを確認することができた。

本年度は平成19年度に確認した大手道を挟んで、東西2箇所の調査区(P10・P11)を発掘した。西側のP10調査区では、平行する2列の石垣で区画された屋敷地を確認し、大型の堅穴状遺構や石組井戸などの遺構を検出した。堅穴状遺構は7×3m、深さ0.8mで、完形の土師器皿が多く出土した。東側のP11調査区では、径1～2mの土坑や石組井戸などを検出した。両調査区からは16世紀代を中心とした土師器皿、中国製磁器の碗や皿、瀬戸・美濃焼の茶碗、越前焼の甕・壺・すり鉢のほか、文房具の硯や茶道具の石臼などが出土した。今回の調査では、戦国時代の大手道に面した屋敷地の配置と内部の構造を、具体的に知る上で貴重な成果をあげることができた。(谷内明央)



まるのうちほん 丸の内7番遺跡

所在地 金沢市丸の内地内

調査面積 6,820㎡（平面積 3,400㎡）

調査期間 平成22年4月26日～平成23年3月1日

調査担当 山川史子、金山哲哉、安中哲徳、谷内明央、
空 良寛、魚水 環、北村啓悟、木原伊織



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・金沢城跡の北東側を画する白鳥堀に隣接する金沢城下町の遺跡で、加賀藩の公事場と武家屋敷内の一部を調査した。
- ・複数の遺構面を確認し、最大4面の調査を行った。礎石建物や掘立柱建物に加え、石組の池や水路、導水管路、井戸、石敷、道路、大型の土坑等の遺構を検出し、庭園内の水路状遺構には景石と考えられる大型の石材を確認した。
- ・遺物は近世前半頃を中心に、中世～近世後半の土師器や陶磁器、土製品、瓦、銅銭、煙管等の金属製品、鉄洋、漆器、下駄等の木製品、石臼・碁石等の石製品が多く出土した。

昨年度に引き続き第2次調査は、金沢地方裁判所裏庭の平面積3,400㎡を対象に、最大4面の遺構面、累計6,820㎡の調査を実施した。遺構は、上面の第1面では、18～19世紀頃の礎石建物根石列や水路状遺構、小規模な池状遺構を検出した。第2面は17世紀前半～後半頃、第3面は17世紀前半頃を中心とする礎石建物や掘立柱建物、石組の池や水路状遺構、導水管路状遺構、井戸、石敷、石組の方形区画、水溜状遺構、道路状遺構、大型の土坑などを検出した。石組の池状遺構は、数次の改修を受けており、大型で深いものから小さく浅いものへと変化している。最下層面となる第4面には、中世後半～17世紀前半にかけての掘立柱建物や石組井戸、池状遺構などを検出した。建物を検出した部分では、第3面を挟み、火災に伴うと考えられる焼土層を2層確認しており、2度の大火の痕跡を確認している。今後の遺物整理作業による遺構の時期判断にもよるが、武家屋敷が2度の寛永または、別の大火により被災し、それに伴い庭園も大規模に改修された可能性を考えている。

今年度の調査でも絵図で公事場北側に書かれていた、白鳥堀から分岐して延びる水路や土居の遺構は確認できず、公事場を示す遺構・遺物も確認できなかったが、調査区の大部分は、武家屋敷に付随する庭園であったと考えられ、白鳥堀から水を引いていた可能性がある水路状遺構では、階段状に大型の景石が配置されており、斧の刻印を持つ石垣を転用した石材も確認している。（安中哲徳）



1・2・4区第1面完掘状況遠景（北西から）



1・2区第1面完掘状況（南東から）



1・2区第2面検出の石組池状遺構（西から）



1・2区第3面検出の石組池状遺構（南東から）



1区第3面水路状遺構内検出の景石（東から）



刻印を持つ石垣材を転用した景石（南西から）



1区第2面水路状遺構内出土の石塔笠



5区第2面検出の桶と竹樋の導水管路状遺構（東から）



3区第2面石組井戸断割りと桶の検出（西から）



6区第3面検出の石組区画と道路状遺構（北西から）

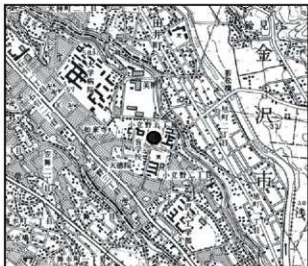
小立野ユミノマチ遺跡

所在地 金沢市小立野5丁目地内

調査期間 平成22年6月29日～同年12月6日

調査面積 3,195㎡

調査担当 土屋宜雄 荒木麻理子 稲葉浩一



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・江戸時代の東西および南北方向の区画溝や塀、礎石を伴う建物、小穴、大溝、井戸、土坑、畝溝などを確認した。
- ・調査地は江戸時代の絵図等にみられる武家地の一角にあたると思われる。

小立野ユミノマチ遺跡は、石川県立金沢商業高等学校の改築工事に伴い、同校のグラウンド内で新たに発見された遺跡で、金沢市内を流れる犀川と浅野川の間に挟まれた小立野台地上に位置する。

調査では、江戸時代の東西および南北方向の区画溝、礎石を伴う建物、欄列あるいは掘

立柱建物を構成すると見られる小穴、南北方向の大溝、井戸、土坑、畝溝などを確認した。これらの遺構からは17世紀後半～19世紀の肥前・瀬戸などの陶磁器や灯明皿として使用された土師皿のほか、瓦、砥石・硯などの石製品、銅銭・煙管等の金属製品、筭・小玉などのガラス製品が出土している。

調査区の西側で確認した東西辺約18m×南北辺約40mの長方形の区画においては、内部から井戸を検出しており、建物などが存在した可能性が高いと考えられる。また、この区画の南北辺の一部に溝と重複して柱穴列が残ることから、区画溝が設けられる以前には、塀などにより区画されていた可能性がある。また、この区画の外（東）側では、畝溝を検出しており、耕作地としての利用も確認できる。なお、区画の内外で確認された土坑の一部には、平面形方形や円形等を呈するものが多数重複して大規模化し、深さが2m以上に及ぶものも見られた。このような大規模土坑の中には、内部に入り込みのための階段やスロープ状の構造が設けられたものもあり、これらの土坑の用途としては土取りあるいは貯蔵が考えられよう。

江戸時代の絵図等によると、調査区は加賀藩重臣の横山家の下屋敷および持弓組の足軽屋敷が置かれていた辺りに相当しており、絵図にみえる武家地の一角にあたると思われる。（荒木麻理子）



調査区全景（南西から）



調査区全体図 (S=1/500)



東西方向の区画溝



礎石を伴う建物



階段状構造物を伴う大型土坑



掘立柱建物あるいは柵列を構成する小穴

ようかいち 八日市D遺跡

所在地 金沢市八日市1丁目地内

調査期間 平成22年11月18日～同年12月22日

調査面積 440㎡

調査担当 端 猛、荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

も柱穴の存在を確認でき、建物の規模が推定されるなど遺跡の損壊の状況に比べればかなりの成果を上げることができたと言える。

調査では、奈良・平安時代の竪穴建物や掘立柱建物を検出した。平成21年度調査で検出された建物の続きを確認したものが多く、建物の規模が判明したものもあった。また、新たな掘立柱建物も数棟確認した。建物の数は平成21年度調査と合わせて竪穴建物を3棟、掘立柱建物を18棟確認したことになる。中でも、掘立柱建物SB205は梁行7.5m(3間?中世の溝のため不明)×桁行112.5m(5間)と本遺跡では規模の大きい建物であることがわかり、一辺約80cmの方形の柱穴掘り方からは8世紀後半頃の須恵器環が出土した。



調査区位置図 (S=1/5,000)

調査成果の要点

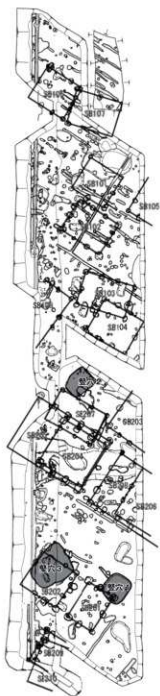
- ・奈良・平安時代の集落跡を確認した
- ・8世紀前半の竪穴建物や9世紀の掘立柱建物を確認

八日市D遺跡は金沢市の西方、八日市1丁目地内に位置する。調査は、平成21年度に引き続き北陸新幹線鉄道高架橋工事に伴い行った。

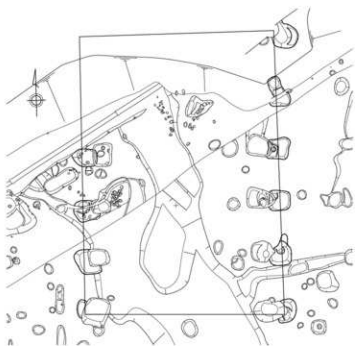
平成21年度調査区の北側に隣接する市道部分を対象に調査したが、昭和期に埋設された上下水道や排水施設等により遺跡が損壊されている部分もあった。ただし、僅かな残地でも

平成21年度の調査成果と合わせ、8世紀前半頃の竪穴建物から掘立柱建物へと建物の形態が変わり、掘立柱建物の中でも9割近くを占める南北棟の建物群とやや西方に主軸を振る建物が存在することが明らかになった。今後、出土遺物と共にこれら建物の関係を整理し検討することで集落の変遷を明らかにすることが期待される。

周辺では、過去に土地区画整理事業等により八日市ヤスマル遺跡、八日市サカイマツ遺跡、八日市B遺跡、八日市C遺跡など多くの発掘調査が行われている。中には8世紀前半の竪穴建物と8世紀～9世紀前半の掘立柱建物が検出される例もあり、本遺跡とその様相は似通っている。建物の配置や規格を中心に地域一帯の中での本遺跡の評価についても検討が必要である。(端 猛)



SB205遺構図 (S=1/150)



H21・H22調査区合成図 (S=1/500)



調査区完掘状況 (南西から)



調査区完掘状況 (南西から)

横江 D 遺跡

所在地 白山市横江町地内

調査期間 平成 22 年 5 月 10 日～同年 12 月 22 日

調査面積 4,050m²

調査担当 白田義彦、大西 顕



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・手取川扇状地上に営まれた弥生時代、中世の集落跡
- ・弥生時代後期後半の竪穴建物、打製石斧埋納遺構を検出した。
- ・中世の掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構、土坑、溝などを検出した。

北陸新幹線建設工事に伴う調査で、平成 21 年度に引き続き調査を行った。平成 21 年度は主に付替市道部分の調査を行い、平成 22 年度は主に幅約 7m の市道部分の調査を行った。

弥生時代の主な遺構は竪穴建物と打製石斧埋納遺構である。竪穴建物は過年度の調査で一部を確認しており、今回の調査で未検出の部分を

確認した。平面形態は隅丸方形を呈し、平面規模は 5.3 × 5.3m、深さは約 40cm であり、弥生時代後期後半の土器が出土している。打製石斧埋納遺構は完形の打製石斧が 4 つ並んで出土した遺構で、平面形態は不整形を呈し、平面規模は 1.1 × 1.1m、深さは約 10cm である。埋納遺構からは土器が出土していないので、遺構の時期は断定できないが、周辺の遺構と出土土器から考えて、弥生時代後期～古墳時代初期のものとなろう。この埋納遺構は竪穴建物から南西へ、45m の地点で検出した。

中世の主な遺構は掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸であり、12 世紀～15 世紀の遺物が出土している。過年度の調査で掘立柱建物を多数確認した隣接部の調査で掘立柱建物を検出したが、線路際にまで掘立柱建物はのびていなかった。その掘立柱建物群と竪穴状遺構は調査区西側で確認し、同時併存する可能性が高い。井戸と掘立柱建物群は離れているので、直接関係するものではない。竪穴状遺構は今回の調査で 2 基確認し、過年度の調査と合わせて 3 基確認した。3 基とも平面形態、規模が似ており、一辺 3.1～3.5m の方形を呈し、深さは 1～1.2m を測る。井戸は 3 基検出し、どれも井戸枳材は残っていなかった。調査区西側で 1 号井戸を検出し、3.5 × 2.8m、深さ 1.2m の楕円形を呈す。調査区東側で検出した 2・3 号井戸は 2 基隣接し、造り替えられたものであろう。ともに直径 1.1m 前後の不整形を呈し、深さは 2.7m 以上ある深いものであった。(白田義彦)



調査区位置図 (S=1/3,000)



豎穴建物遺物出土狀況



豎穴建物完掘狀況



打製石斧出土狀況



掘立柱建物群完掘狀況



1号井戸完掘狀況



2号・3号井戸完掘狀況



1号豎穴状遺構完掘狀況



2号豎穴状遺構完掘狀況

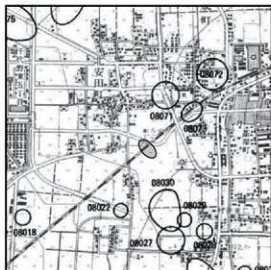
また やす だ みなみ
北安田南遺跡

所在地 白山市北安田町地内

調査面積 3,400㎡

調査期間 平成22年4月23日～同年10月7日

調査担当 浜崎悟司 中泉絵美子

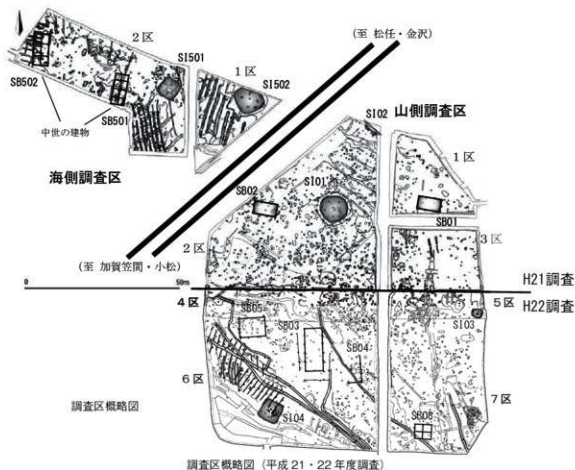


遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

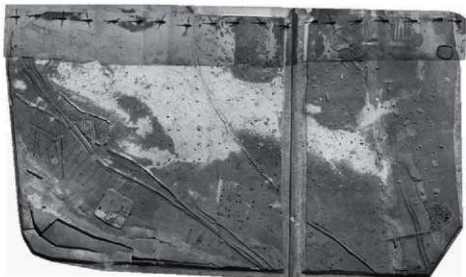
- ・前年度調査地点の南側隣接地において、弥生時代終末期～古墳前期、古代、中世の集落跡を確認した。
- ・弥生時代終末期～古墳前期の竪穴建物を2棟、確認した。当期の遺構は広範囲に散在する。
- ・古代の掘立柱建物を3棟程度検出した。建物には用水路を伴った畠地が付属する可能性がある。
- ・中世の掘立柱建物を1棟確認した。

前年度に引き続き北陸新幹線建設に伴う発掘調査を実施した。前年度山側調査区の南辺に接した南側(4区～7区)が調査対象となった。調査の結果、当遺跡が南東-北西方向に伸びる微高地に展開したこと、また、今年度調査地がその最高所を含むことが判明した。

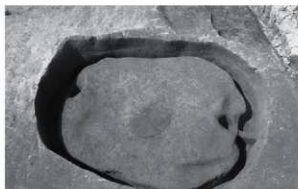


今年度の調査では、弥生時代終末期～古墳前期及び中世の集落については前年度と同様、建物が散在する状況であった一方、前年度には不詳であった古代の遺構が比較的まとまって検出された。当遺跡の古代の集落は掘立柱建物で構成されるが同一地点における重複が認められないため、9～10世紀の交頃の比較的短期の居住であったものとみられる。一方、調査区南西部を南東・北西方向に進む溝には造り替えが認められる。これらの溝群は微高地の最高所に開削されていることから水路と判断される。また、5区西部では水路の脇に畝溝群が検出されており、水路・畝溝群と掘立柱建物とは平面的に併存しうる位置関係にある。従って、今年度検出された古代の遺構群は当時の宅地と付随の高地であった可能性があるとみられる。

(浜崎悟司)



調査地全景



竪穴建物 SI03



竪穴建物 SI04



平安時代の水路と畝溝群



掘立柱建物 SB06

道村 B 遺跡

所在地 白山市宮丸町地内
調査面積 16,420㎡
調査期間 平成 22 年 4 月 13 日～
平成 23 年 1 月 28 日

調査担当 浜崎悟司、澤辺利明、端 猛、布尾和史、
林 大智、宮川勝次、荒木麻理子、
加藤克郎、空 良寛、坂下博晃、稲葉浩一、
林 亮太、荒川真希子、畑山智史



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・古墳時代末から平安時代末まで継続する集落跡。
- ・古墳時代から平安時代初め頃までの集落は規模が大きい。
- ・集落は洪水により 2 回水没するが、その都度再建される。
- ・部分的ながら上・中・下層の旧土壌層があり、その間に洪水層を間層として挟む区域がある。
- ・金属製の耳飾、馬具(轡)、和同開珎ほか皇朝十二銭が 6 枚出土した。

発掘調査は、鉄道・運輸施設整備支援機構大阪支社が実施する北陸新幹線建設工事（金沢白山車両基地等整備）に伴うものである。調査は平成 22 年 4 月から始まり、調査中にあらたに遺構面が複数存在する範囲が確認されたこともあり、調査範囲は 9,795㎡、累計の調査面積は 16,420㎡となった。

遺跡は手取扇状地扇尖部海寄りに立地する。調査により確認されたのは弥生時代後期の活動痕跡と、古墳時代末から平安時代の集落跡である。当時の微地形は、調査の結果、ほぼ南北方向に流下する河川とその間にはさまれる島状の微高地から形成されていたものと理解され、西から流路 1・微高地 A・流路 2・微高地 B・流路 3 に区分される。集落跡については、微高地上に立地している。なかでも微高地 A 北側や微高地 B では部分的に上層・中層・下層の 3 層の土壌が形成されている箇所があり、洪水等の影響で少なくとも 2 度泥中に埋没している点が特徴的である。

出土品整理等は今後実施する予定であり、検討課題も多いが、以下に、現時点での遺跡の変遷案を簡単にまとめる。

「道村 B 遺跡 1 期」

弥生時代後期から終末頃で、数基の土坑と数箇所の遺物散布地点が確認された。いずれも微高地 A で検出されており、微高地 B では遺物の出土が確認されていない。微高地 B の下層土壌は微高地 A の土壌に比べ標高が約 50cm 低く、該期には鞍部か河川の一部のような低湿な状態であり、遺物や遺構が残されるような活動範囲ではなかったようである。



写真 道村B遺跡下層全体

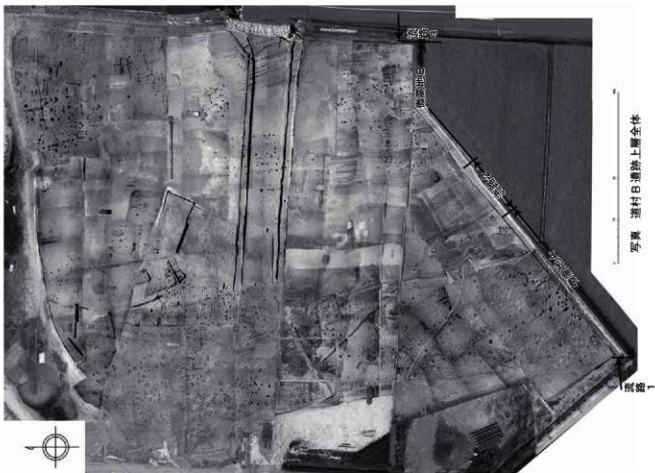


写真 道村B遺跡上層全体

「道村 B 遺跡 2 期」

古墳時代終末期から平安時代初期頃であり、堅穴建物と掘立柱建物からなる集落が形成されている。この時期には微高地 B の下層土壌もすでに乾燥していたらしく、建物は微高地 A よりも微高地 B に多く分布している。堅穴建物は方形・隅丸方形を呈し一辺が 4-5m ほどの規模を呈するものが多い。床面には主柱穴やカマドがあるものとなないものがみられる。時期的に古いものにはカマドがつかないようで、床面に焼土が 1- 数箇所認められることから、地床炉であったとみられる。遺構からは一般に須恵器・土師器が出土しているが、SI0013 からは赤色に塗彩した土師器盤、SI6013 からは砥石が床面から出土した。カマドがあるものについては概ね建物の南辺で東に寄せてカマドが設置される例が多く、またカマドから燃焼後の炭・灰を掻きだしたかのような状態で建物跡中央付近に燃焼残渣が溜まった例も数例みられた。掘立柱建物は、2 間×3 間のほかに、3 間×5 間等となる密集して柱をたてるタイプのものが目立つ。建物は重複しているものも多く、近接して分布するものも含めれば数回の時期に分けられそうである。

「洪水①」

標高の低い微高地 A の北側や微高地 B については下層土壌と中層土壌の間に黄褐色系のシルトが間層として挟まれていた。また、下層土壌層の上面やベースで検出した堅穴建物と掘立柱建物の一部には覆土と同様なシルトが堆積しているものがあり、洪水時に泥水に没した後、水が引いて土砂が溜まった状況と思われた。これにより集落は平安時代の始め頃、洪水の被害を受けたと推測される。この洪水起源とみられるシルト層や堅穴建物覆土からは、流されたものと思われる須恵器や土師器のほかに、金属製馬具（轡）や金属製環状耳飾が出土している。これらは道村 B 遺跡 2 期の集落に伴う可能性が高い。

「道村 B 遺跡 3 期」

洪水①により集落が途絶した後、水が引ききり地面（洪水層）の乾燥を経て後、集落が再建されている。遺構は、洪水層上面もしくは中層土壌下部が検出面となる。掘立柱建物、堅穴建物が検出されており、掘立柱建物は 2 間×3 間の欄柱式、堅穴建物は一辺が 2-3m の小ぶりなものが多くなる。出土遺物には 9 世紀を主体としその前後のものがみられる。

「洪水②」

微高地 B には、洪水層・中層土壌の上にもう 1 層シルト層がのる。これにより 3 期集落は再び洪水等の影響により水中に没したものと思われる。

「道村遺跡 4 期」

洪水②の後には、総柱の掘立柱建物数棟を主体とする小規模な集落跡が検出されている。建物の周囲には、耕作域が広がっていたらしく、畝間溝状の小溝群が展開している。建物につく遺物は少ないが、遺跡の中では、須恵器供膳具が作られなくなる 11 世紀台の遺物がままとまっていることから、集落の終末はそのころになるものと思われる。(布尾和史)



土層断面



掘立柱建物 (2期)



竪穴建物 (2期)



SI11 遺物出土状況



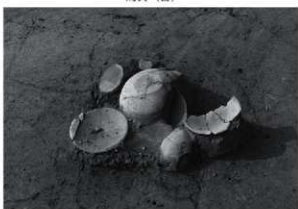
土鈴出土状況 (2期)



馬具 (書)



掘立柱建物 (4期)



土師器出土状況 (4期)

平成 22 年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は加茂遺跡（津幡町、平成 16 年度調査）、熊坂花房砦跡（加賀市、平成 18 年度調査）、宮保館跡他 1 遺跡（白山市、平成 21 年度調査）、七尾城跡（七尾市、平成 18、19、20 年度調査）の整理作業を行った。

上半期から引き続き行った加茂遺跡の実測・トレースは、そのほとんどが棒状や板状の木製品だった。1m を超える大型品が多く、水槽からの出し入れや実測台への移行など体力を要する作業だった。

熊坂花房砦跡は 2 日間というごく短い期間に、記名・分類・接合から実測・トレースさらに遺構図トレースを行った。行程写真を撮りながら進める作業はなかなか慌ただしいものだった。

宮保館跡他 1 遺跡は土師器や陶磁器、石製品、金属製品、漆器碗、木製品などの実測・トレースと遺構図トレースを行った。たっぷり泥が付着した漆器碗の実測では、漆を傷つけないように泥を取り省く作業に多大の注意力和根気を要した。金属製品の馬の轡は向きや方向がわからず苦勞したが参考資料をもとに実測する事が出来た。また柿經の実測では割合ははっきりと法華經の一部を確認する事が出来、興味深く作業を進める事が出来た。

七尾城跡は土師器、陶磁器、下駄、石臼、かんざし、飾金具など当時の生活を思わせる遺物の実測が多かった。「永祿」銘の狛犬台座と梵字の刻まれた板碑の実測ではほぼ全面に残されたノミ痕の実測に気を遠くし、また裏面に細い線で絵が描かれている硯では繊細な線の表現に苦勞した。水銀朱をほどこされた甲冑の小札も多数出土し取り扱いに注意しながらの実測だった。石組の井戸などの遺構図トレースを行い、下半期の作業を終えた。

（河村裕子）

県関係調査グループ

下半期は飯田町遺跡（珠洲市、平成 20 年度調査）、五歩市遺跡（白山市、平成 21 年度調査）、大泊 A 遺跡（七尾市、平成 20 年度調査）、古府・国分遺跡（七尾市、平成 16 年度、平成 17 年度調査）の整理作業を行った。



泥土を取り除く（宮保館跡他 1 遺跡）



甲冑小札の実測（七尾城跡）

飯田町遺跡では、近世（18～19世紀前半）の陶磁器・土師器を主体とした遺物を整理した。そのなかでも特に目をひいたのは大量の土錘であり、線刻の帆掛け船や円形の刻印を二つ施したものもあった。

五歩市遺跡では弥生土器、中世の陶磁器類、またそれに伴う石鎌、打裂石斧、行火、石臼等を整理した。

大泊遺跡は、古代から中世にかけての製塩遺跡であり、多量の製塩土器とともに脚台や土師器、須恵器、そして少量ながら縄文土器が出土している。製塩遺跡の整理では、多量の粉砕された製塩土器の接合に苦勞するが、今回は全体の形状がわかるまで接合できたものはなかった。また、木製品では、下駄、しゃもじなどを、石製品では軽石、珪藻土の炉石などを実測・トレースしている。

古府・国分遺跡では、主に古代を中心とした出土品を整理している。須恵器、土師器、木製品等であるが、そのなかでも木製品は井戸の部材を多く実測・トレースしている。特に SE02 は井桁、隅柱、側板等の残りも良好で、井戸の底からは祭祀のためのものか、齋串や刀または剣の模造品が出土している。今回、試行錯誤で取り組んだが、こうした大型の遺構から出土した構築部材を整理するにあたっては、計画性を持ち、できるだけ少人数で行うべきだと思った。（横山そのみ）

下半期におこなった遺物洗浄は、当年度に発掘調査をおこなった丸の内7番遺跡出土品が中心であった。当遺跡の遺物洗浄作業は発掘調査と併行しておこなったため、地区ごとなどある程度遺物量が

まとまった段階で洗浄作業をおこなった。そのため、その間隙をつなぐように新幹線建設に伴う神田遺跡、高見スワノ遺跡、宮保B遺跡出土物の洗浄をおこなった。さらに、当年度に実施していた県立金沢商業高等学校建て替えに伴う発掘調査から出土した遺物についても、作業員を追加してすべてを洗浄した。このように、発掘調査と同じ年度に遺物洗浄をおこなった。（伊藤雅文）



土錘を分類する（飯田町遺跡）



井戸隅柱の実測（古府・国分遺跡）



井戸側板の実測（古府・国分遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は9月下旬から10月中旬まで松山D遺跡（加賀市、平成19年度調査）の記名・分類・接合から始まった。弥生時代から中世にかけての遺跡ということで、土師器、須恵器、木製品、石器、金属などの実測・トレース、および遺構図トレースと一連の作業を行った。

続いて五歩市遺跡（海側幹線）（白山市、平成20年度、平成21年度調査）の記名・分類・接合および実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。遺物の種類は弥生土器をはじめ、木製品そして緑色凝灰岩製管玉の未製品および砥石、敲石、台石など、玉生産が行われていた遺跡をうかがわせる石器の数々であった。下半期の中で一番長い期間の当遺跡の実測は、甕、壺、高杯など様々な器種があり、調整も残りがいい状態のものが多く描きこたえのあるものとなった。

年が明け1月中旬から金沢城跡（金沢市）の整理作業に入った。いもり堀は平成19年度、平成20年度調査、玉泉院丸は平成20年度、平成21年度調査と、調査年度が分けられていた。それぞれに分類のみ(瓦)の作業があり、改めて瓦の種類や複雑さを感じた。遺物は土師器、陶磁器、瓦、木器、石器、金属など様々あり、作業工程は記名・分類・接合および実測・トレースを行った。最後に大型石製品（手水鉢、地蔵、凝灰岩延石、灯籠中台、石柱）の実測に入ったが、鑿痕や敲き痕など加工痕の表し方が難しく、そして何より一面描き上げるたびに何人かで持ち上げるといった、重量のある大型石製品ならではの苦労があった。

（林かおる）



記名・分類・接合作業（松山D遺跡）



記名・分類・接合作業（五歩市遺跡）



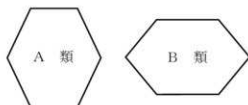
大型石製品の实測（金沢城跡）

弥生住居の想定復元 2

久田 正弘

1. はじめに

今回の報告は、本誌第18号で行った「弥生住居の想定復元」(久田2007)の続きであり、石川県羽咋市吉崎・次場遺跡県調査区(福島ほか1987・1988)を検討してみたい。県営ほ場整備事業に伴う発掘調査により5年間で14地区の発掘調査が行われ、その中から住居の存在が想定されたS・M・N区を検討する。なお多角形の柱配置では、前回同様に縦長の配置をA類、横長の配置をB類(第1図、宮川ほか2004)とする。



第1図 6本柱配置の分類

2. S区の復元例

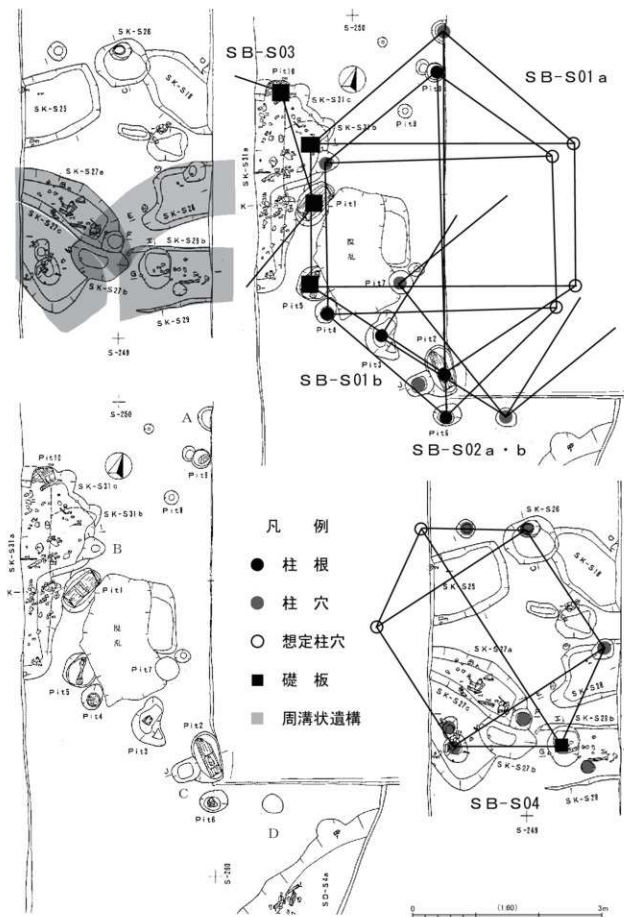
S区は次場町集落の南側に位置する調査区(第2図)であり、幅約3m、延長約180mが調査された。調査区の高所はS-27・28区付近が標高約1.5mであり、遺跡の中心部のH・I区の標高よりは約0.3m高い。調査区は大きく2か所に分かれ、クランク状に曲がっており、柱穴が確認される北側の調査区を検討したい。

S区はクランク状の調査区(第6図左)は、弥生後期後葉～古墳前期初頭の土器が出土し、建物の柱穴はS区250～300mに分布しており、竪穴住居は無くて掘立柱建物が想定(福島ほか1988)された。調査区の幅は3mなので建物の復元を断念されたが、S-25区 Pit1・2は同じ形態の礎板を持つことから同一建物の柱穴と想定され、また柱穴の痕跡から柱は直径15～20cmと報告された。では、発掘調査時の実測図面から情報を読み取ってみたい。

まず、報告書の原因を左側に配置し、右側に復元案を提示(第3～5図)した。同じ柱配置の建物が建替えられたと思われるものは、a・bなどの枝番を付け、確実性の少ない建物の柱間は破線とした。



第2図 調査区配置図(1/10,000)



S区 245-248m (第3図左上)には、東西の両側で土坑が同じ方向に2個連っており、周溝状に巡る可能性があり、調査区の東西方向に周溝を持つ建物を想定することが出来よう。また、北側にあるSK-S25・18も個別に周溝状になる可能性もあろう。

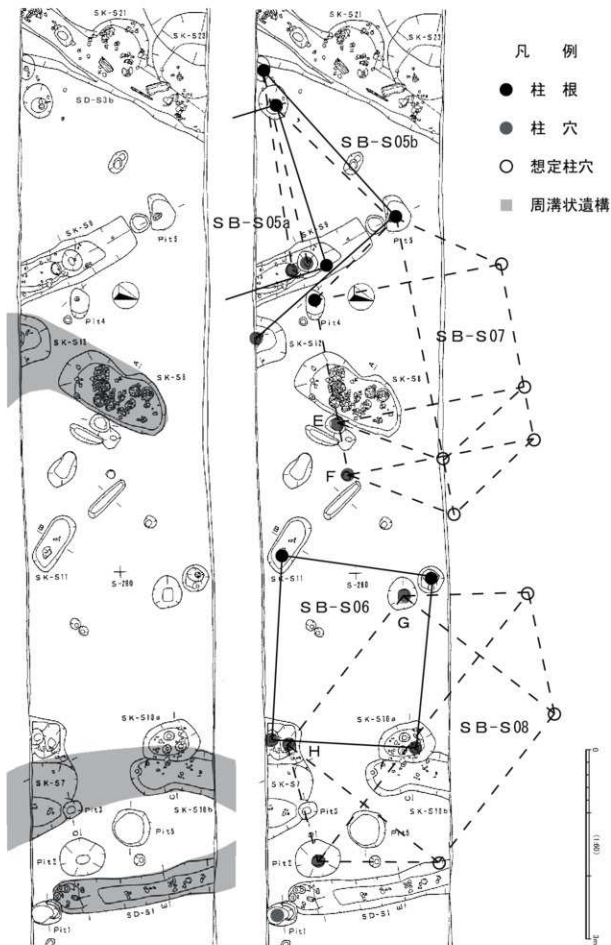
南側には、Pit1・2の礎板が同じ技法によることから、同一の建物の柱穴と想定されている。建物を想定すると、北東側に直角に伸びた4本柱建物(第9図SB-S02c柱間3.4m)か6本柱建物(第8図SB-S01c)が考えられる。しかし、柱根と礎板穴はPit10を除けば、PitA・9→B・1→5・4→2・6へと2個セットで弧状に巡ること、その弧状の内側に殆どの柱根・柱穴が入っていることが、図面から読み取れる。そこで、遺構実測図などを検討すると、SK-S31bには礎板と思われる板(断面図Iラインから判断)があり、全ての礎板の上面は検出面からの深さは20cm以下であり、柱穴と思われる深さ30cm以上のピットがあることが判明したので、第3図右側に柱根・柱穴・礎板を表示した。ピットBにはレベルの記載がなかったが、柱穴と判断した。その理由は、PitA・9とPit2・6を6本柱建物(B類)の主軸と想定すると、PitA・9、SK-S31bの礎板・B、Pit5・4、Pit2・6の関係は、6本柱建物を近接して建て替えられた結果とみる事が可能だからである。

では、建物の想定復元(第3図右)を試みてみたい。北側にある建物をSB-S01aと呼称し、主軸長は5.4mであり、北側の柱穴からの柱間は2.7+2.25+2.5mである。主軸と西側の側面までの距離は2.1mなので、建物の復元幅は4.2mと想定した。南側にある建物をSB-S01bと呼称し、主軸長は5.5mであり、Pit9からの柱間は2.3+2.4+2.5mである。建物の主軸と西側の側面との距離は1.8mなので、建物の復元幅は3.6mと想定した(第8図)。北側に存在するSK-S28・29は弧状に巡る周溝の作替えとみると、SB-S01の建替えとも連動しているように思える。また、同じ形態の礎板を持つPit1・2が同一の建物と想定すると、Pit8・2が主軸(長さ4.2m)となり、それから約1.7mの距離においてPit1・4の側面ラインが存在する。Pit8からの柱間は2+1.8+2.1m(第8図SB-S01c)である。Pit8は検出面からの深さは9cmと浅いが、Pit1とPit2の礎板までの深さは5cmと12cmと浅いので、礎板があったと仮定すれば、大きさは躊躇するが、深さは問題がない。よって、Pit8に礎板があったと想定すれば、主軸長4.2m・幅3.4mの6本柱建物を想定可能である。

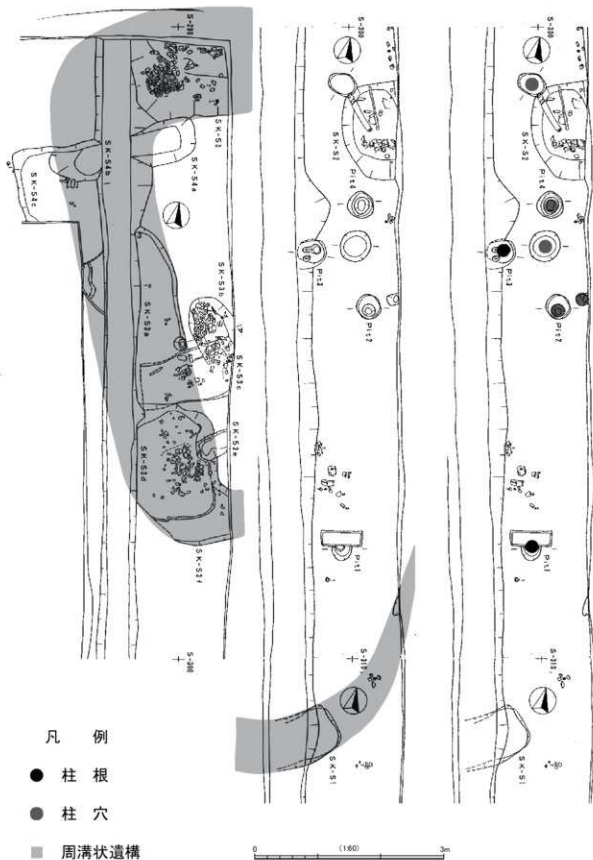
また、Pit1の北西側にはPit10(柱間1.9m)があるので、こちら側に6本柱建物(SB-S03、SK-S27a・cが周溝か)を想定可能であるが、柱が2本しか無いことや調査区外に延びているので定かではない。それとは別にPitDを起点として、4本柱の建物を2棟(第3・8図SB-S02a:PitD・3柱間2.35m、SB-S02b:PitD・7柱間2.7m)を想定可能である。また、PitD・3と攪乱を使って6本柱建物(柱間2.4+2.1m)も想定可能なかもしれないが、確率が低いであろう。

S-24区には周溝の可能性が想定される土坑群(第3図左上)が存在するが、SK-S29bには一段深い穴や、礎板と思われる板があり、周辺の土坑などにも深さ30cmを超える柱穴が存在した。想定される建物は6本柱建物(B類、主軸長4.1m・幅2.8m、SK-S27c柱穴からの柱間は1.7+1.7+2.25m)と4本柱建物(2.8×2.25m)を想定可能であるが、6本柱建物(SB-S04)の可能性が高いと思われる。また、他にも柱穴が4個あるので、建替えなし、別の建物が存在したものと思われる。

S-26区(第6図左側)からは調査区は東側に折れ曲がっており、S-27・28区には2箇所柱根が集中しており、数棟の建物が想定可能である(第4図)。SD-S3bの東側には2個の柱根が近接している。これに対応するように、Pit5(柱根)・SK-S9(柱根・柱穴2個)・Pit4(柱根)があり、4本柱建物が2棟と建替えが想定可能である。SK-S9の柱根を起点としたSB-S05a(柱間2.7・3.3m)と、Pit5を起点としたSB-S03b(柱間3.1+2.9m・2.6+2.9m)が想定可能であり、両者とも建替えも想定される。S-28区には2本の柱根と2個の柱穴から4本柱建物(SB-S06)が想定され、柱間



第4図 S区建物復元図2



第 5 图 S 区建物復元图 3

は南北方向 2.3・2.4m、東西方向 2.7・2.9m である。SB - S06 の東西には、隅円に巡る可能性がある SK - S8・12 と SD - S1 があり、SB - S06 の周溝の可能性もあろう。また、SK - S7・10b も周溝状に巡る可能性が指摘できよう。

第 4 図では 2 箇所 に 4 本柱建物を想定したが、両者の建物のそばに 6 本柱建物 (B 類) を想定することも可能である。それは、Pit5・4 を使って 6 本柱建物 (SB - S07a・b: 主軸長 3.8・4.9m、幅 3m、柱間 1.9+2・2.8m) と S - 28 区の柱穴を使った 6 本柱建物 (SB - S08: 主軸長 5.4m、幅 3m、柱間 1.9+3m) が想定可能であるが、柱根が残っていた SB - S05・06 ほどは積極的に想定するには難しいかもしれない。すると SB07 付近では Pit4 と E・F を使った 4 本柱建物 (柱間 2・2.8m)、SB - S08 付近には G・H を使った 4 本柱建物 (柱間 3m) を、E・F と G を使った 4 本柱建物 (柱間 2.9・2.1m) を想定することも可能であろうか。

S - 29 区以降 (第 5 図) は、東西方向に折れ曲がった調査区が南側に曲がり、調査区の幅も 1.5m 以下と狭くなっている。S - 29 区では、土坑が連なっており、その内側には長さ 5.9m 程度の隅円方形区画が存在する可能性がある。調査区内には柱穴が見られないが、東側に 4 本柱建物を想定することも可能かもしれない。S - 30 区には 2 本の柱根と 5 個の柱穴があり、複数の建物が存在した可能性が想定される。しかし、調査区幅が狭いため、北側の柱穴が集中する地点に 4 本柱建物、南側に 6 本柱建物が存在した可能性を想定 (第 6 図右側) したいが、定かではない。SK - S1 は北東側に少し見られる溝に繋がる可能性があり、周溝になる可能性があろう。

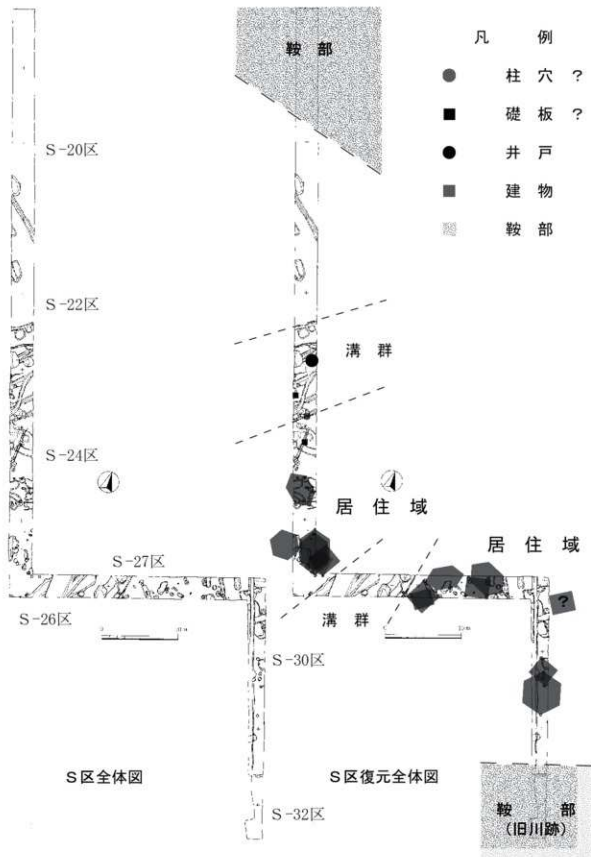
以上、S 区を検討 (第 6 図右側) すると、北側の S - 18・19 区には緩やかな落ち込みがあり、以北は低湿地であり、南側の S - 31 区からは鞍部 (旧川跡) が存在した。この間に囲まれた範囲が弥生時代後期後葉 - 古墳時代初期の居住域である。S - 22・23 区では、北東 - 南西に延びる溝群が存在し、その中に特大サイズの剣貝桶を転用した井戸がある。この溝群は鞍部と居住域の緩衝帯を形成していたが、S - 23・24 区側には柱穴・礎板と思われる遺構もあることから、時期によっては溝群の南側には建物が存在した可能性もあろう。S - 24 区南側 - 30 区が居住域であるが、S - 26 区にある溝群が居住域を 2 つに分けており、両方の居住域では同じ地点で建物が建替えられていたようである。

3. M・N・H 区の復元例

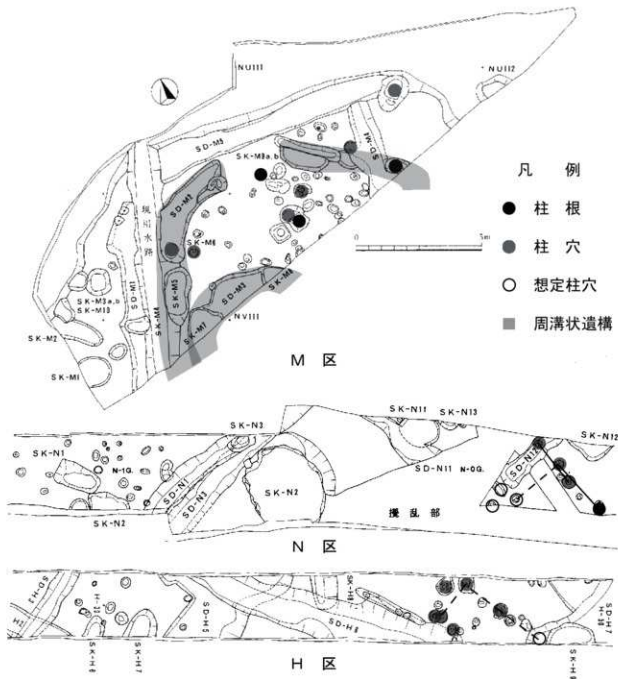
では、他の調査区を検討してみたい。M 区 (第 7 図上段) は、遺跡の北西側の調査区 (第 2 図) にあたり、H 区と直角に位置する。調査面積は約 150m² であり、弥生時代後期末 - 古墳時代前期初期を中心とする時期が主体であるが、弥生時代中期の遺構と奈良 - 平安時代の掘立柱建物の方形柱穴があるという。柱穴は浅いものも多く、また古代の可能性もあることから建物の復元は難しいが、SK - M5・M9 と SD - M2 などが隅円方形に巡る可能性と SK - M7・3・8 も円形に巡る可能性があることから、その内側に建物が存在した可能性を指摘したい。

N 区 (第 7 図中段) は、遺跡の北東側に位置する調査区であり、調査区幅約 3m、長さ約 50m が調査された。N0 区付近 (中段右側) に掘立柱建物が想定されている。N0 区付近は攪乱などがあり、全体が不明瞭であるが、報告書の写真 (福島ほか 1987 図版 21 上段) から判断すると、4 本柱建物の建替え (SB - N01a・b) が想定出来そうである。SB - N01a は柱間 2.3・2.4m であり、SB - N01b は柱間 2m と思われるが、調査区が狭いことや攪乱が多く存在したことから、詳細は不明である。

H 区 (第 7 図下段) は、遺跡の北西部に位置する調査区であり、幅 0.5-3m、長さ 96m が調査された。弥生時代中期 - 古墳時代初期の遺構が確認され、H40-48 付近で柱穴と思われる小穴もある程度確認されるが、建物の規模を確認するには至らなかった。SK - H8 と SD - H7 が周溝と思われたが、時

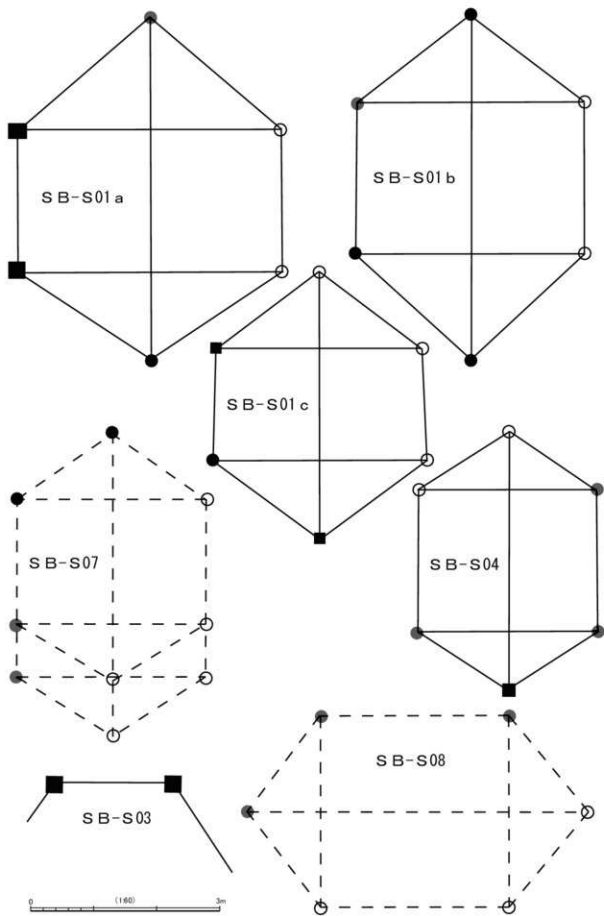


第6図 S区復元建物配置図 (1/500)

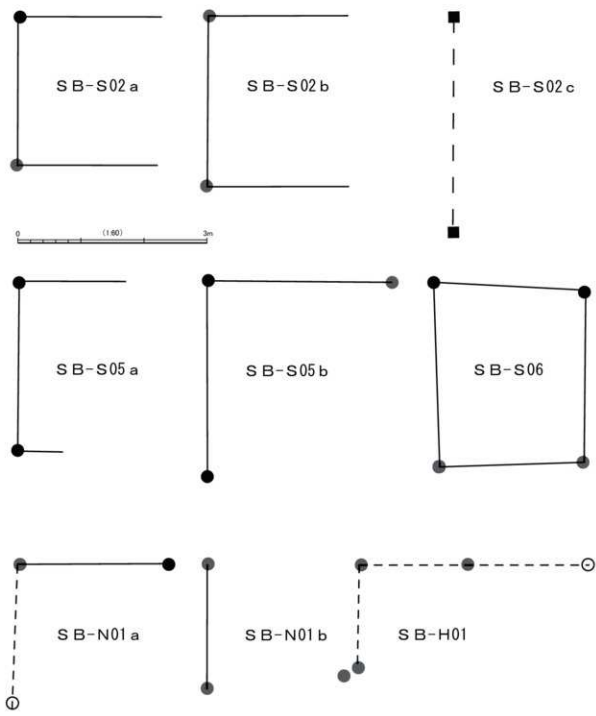


第7図 M・N・H区建物復元図(1/150)

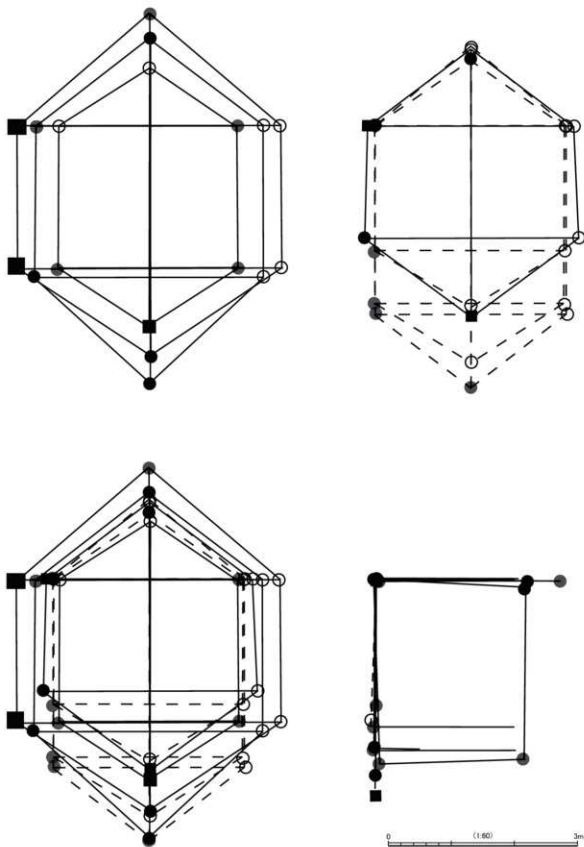
期の特定が出来ないとの報告書の記述から可能性を指摘するにとどめる。柱穴が6個ほど確認されることから、SB-H01(第8図)を想定することも可能であろうが、柱間1.6・1.7mと狭いことから西側(図上側)に複数の建物が存在する可能性を想定した方が、妥当と思われる。



第8図 6本柱建物一覽



第9图 4本柱建物一覽



第10圖 建物規模比較圖

4. 復元建物の検討

今回復元した建物を検討してみたい。6本柱建物は、7棟を想定復元（第8図）したが、柱穴が3本以下の建物が4棟と多く、確実性が少ないのが事実である。柱穴が4個確認されたSB-S01a・b、S04（第10図左上）では、主軸長は4.1・5.4・5.5mであり、5.4mにまとまり、幅は2.8・3.6・4.2mで、まとまりは無い。側辺は2.25・2.25・2.4mであり、2.3m前後にまとまっている。主軸ラインから側辺までは1.7・2.3・2.5・2.6・2.8mとまとまりは無いが、2.3m以上が殆どである。その他の建物（第10図右上）では、主軸長は3.9・4.1・4.2・4.9・5.4mであり、4m前後にまとまりがある。幅は2.8・3・3.4mであり、3m前後にまとまりがある。側辺は1.75・2・2.25・2.4・2.8・3mであり、バラバラであるが2.3・2.9mに少しまとまりがありそうである。主軸ラインから側辺までは1.9・1.9・1.9・2・2.1mであり、2m前後にまとまる。

これらのデータから、主軸長は4.1m前後と5.4m前後、幅は3m前後と3.6m以上、側辺は2m前後と2.3m前後と2.9m前後、主軸ラインから側辺までは2m前後と2.3m以上にまとまり（第10図左下）が認められる。これらを総合すると、3タイプに分類が可能である。1類は主軸長4.1m・幅3m・側辺1.9m・主軸ラインから側辺まで2m、2類は主軸長5.4m・幅3.6m以上・側辺2.3m・主軸ラインから側辺まで2.3m以上、3類は主軸長5m前後・幅3m・側辺2.9m・主軸ラインから側辺まで1.9mとなる。しかし、3類は確実性が乏しくて、また側辺が1・2類より大幅に長いという否定的要素が大きいが、幅と主軸ラインから側辺までは1類とほぼ同じであることから、強ち想定を否定すべきではないかもしれない。4本柱建物は、SB-S06以外は2本の柱穴が殆どであり、建物に成らない可能性も高いのが事実である。また、4本柱建物で有っても、SB-S06のように柱が直角に交わらない方が多いと思われる。しかし、今回想定復元した建物を集成（第10図右下）すると、1辺が2.4mと2.7mにまとまりが認められる。

5. おわりに

今回は、報告書で建物が存在した可能性が指摘されたものを、多角形柱建物の類例が増えた今日的な視点で復元を試みてみた。その結果、6本柱建物では3類型、4本柱建物では2類型の抽出が出来そうな見通しが得られた。しかし、調査区の制約などから不確定要素が多いことから、他の遺跡などでの類型化を行い、比較検討を行って今回の想定復元の是非を判断したい。

参考文献

- 久田正弘 2004 「多角形柱建物の覚書」「穴口遺跡・穴口貝塚」（財）石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2007 「弥生住居の想定復元」「石川県埋蔵文化財情報第18号」（財）石川県埋蔵文化財センター
- 福島正実ほか 1987 「吉崎・次場遺跡（資料編1）」石川県立埋蔵文化財センター
- 福島正実ほか 1988 「吉崎・次場遺跡（資料編2）」石川県立埋蔵文化財センター
- 宮川勝次ほか 2004 「東の場タケノハナ遺跡」（財）石川県埋蔵文化財センター

畝田・寺中遺跡ほか2遺跡（畝田西遺跡群）出土 第1号木簡補遺

和田 龍介

はじめに

金沢市畝田・寺中遺跡ほか2遺跡（畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡）は、金沢市北部、大野川と犀川に挟まれた金沢平野の微高地上に立地する弥生時代～中世にわたる複合遺跡である。このうち古代については、2点の郡符木簡を含む計10点の木簡、「津司」「語」「天平二年」などの特徴的な語句を含む300点以上の墨書土器、70棟以上の掘立柱建物などきわめて官衙的色彩の濃い遺跡であり、古代加賀郡が管理する港湾施設「郡津」に推定されている。これまで7次にわたり発掘調査が実施されている。

畝田・寺中遺跡から出土した木簡については、出土品整理作業を経て、平成16年度に当センターにて真空凍結乾燥法による保存処理^①を実施したところ、処理過程における脱色によって釈文解読時には判読できなかった墨痕が新たに浮かびあがった。これを受け、畝田遺跡群全体にかかって出土文字資料の指導を受けていた国立歴史民俗博物館平川南館長と筆者で、保存処理済み木簡の全てについて赤外線カメラ等を用いた再判読を実施した結果、本誌及び「木簡研究」等で既報告の釈文の一部について修正が必要となった。

釈文の修正については平成17年度刊行の報告書にて反映することができたが、実測図及び画像等については編集・時間上の問題から盛り込むことができなかった。特に、今回報告する第1号木簡については、木瘦せや剥落により文字等の墨痕が全く期待できなかった裏面から、新たに馬が描画されていたことが判明したことは最大の成果である。今回遅ればせながら、誌面を借りて報告したい。なお、1号木簡の概要については、報告書^②および本誌第4号所収の筆者の報文^③を見られたい。

馬の墨画について

馬の絵は木簡表面に墨画されており（図1）、肉眼では墨痕を追うことは困難である。全面にわたって赤外線カメラによる観察を試みたが、馬の墨画以外には墨痕を確認できなかった。

墨画は左向きに描かれ、下半身のみが残っている。残存する胸～尾の長さ153mm、高さは確実に墨痕が確認できる位置まで46mmである。墨画位置は（表面から見て）下端に逆位で描画されており、上半部は欠損している。断面にはキリオリ痕跡が明瞭に確認でき、表面も下端の一部剥落による欠損以外はほぼ完存していることが文意から判断できる。このことから、表面の木簡は馬が描画された板材を転用し、キリオリ等で成形後墨書され、その後溝に廃棄されたものと判断できる。裏面は出土当初から木瘦せが著しく、表面がケズリにより平滑であることに比して劣化の度合いが大きい。調整痕跡は確認できなかった。

墨画は風化や表面の剥落により墨痕が失われており、特に馬の前脚部および膝から下において顕著である。部分的に残る墨痕から、馬の脚がどのように描かれていたかを判読することは困難である。また胸部について、赤外線カメラで黒く写される線（画像拡大1）が、墨画に起因するものなのか、土中に遺存していた際の諸作用かとは判然としないがきわめて太く、濃くなっている。発見当初はこの太い線が胸のラインで、その右側に3～4条引かれている縦線は馬具の一部を描画したものと考えていたが、わずかに残る前脚の残存線や、はっきりと見える後脚とのバランスを考えると、やや胸がせり出しすぎている感が否めず、これらの線が馬装・馬具を表現していたかどうかは不明である。

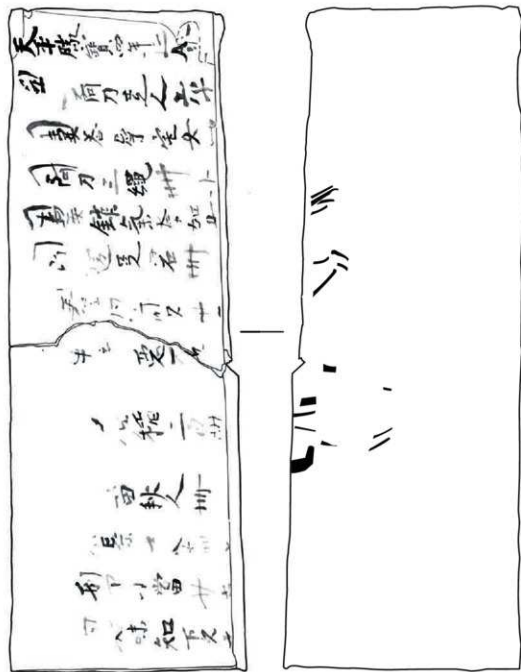
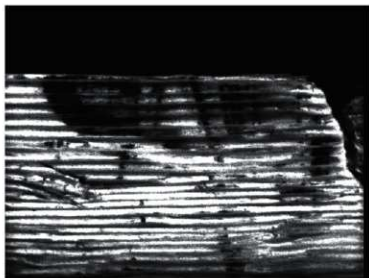


图 1 1号木簡实测图 (S-1/2)



馬全体画像



画像拡大1

胸～腹部分。前脚はほぼ墨痕が失われ、付け根付近に縦線が見えるものが相当する。胸部分には縦線がいくつか見られ、あるいは馬具を表現したもののか。



画像拡大2

後脚～尻尾部分。後脚は馬の関節描画によく見られる逆くの字に描かれる。後脚右の複数の縦線は、全体のバランスから尾を表現したものと推定。

図2 赤外画像

馬墨画の評価

発掘調査によって遺跡から出土した絵馬は、松尾充晶の集成^{※1}によれば31遺跡91点(2006年段階)であるが、その後奈良県日笠フシダ遺跡で奈良時代の絵馬が出土するなど数は増えているものと考えられる。

本馬墨画については、筆者は「祭祀に用いられた奉納物」としての「絵馬」ではなく、截画・習書の類、絵画資料とみなしている。その理由として、馬墨画材を転用し文書木簡として用いていることにある。使用後とはいえカミへの捧げ物を転用することについては疑問が残り、他にも例を見ることができない。絵馬の裏面に墨書が残るものとしては、静岡県神明原・元宮川遺跡(平安後期～鎌倉時代)、静岡県郡遺跡(8世紀)があげられるが、いずれも木簡を転用して絵馬にしている(馬の墨画が文章に規制されていない)と考えられる。また出土例で多く見られる、板材をいっばいに用いて馬を墨画するのではなく、板材に比して馬の絵が小さいことも、本例が絵馬として用いられたものではないことを示唆している。

以上のように本木簡を「絵馬」の例としては見なすがたいが、天平勝宝四年以前の馬墨画の資料として本例を紹介しておきたい。

注

- ※1 中山由美 2006「金沢市畝田西および畝田東遺跡群出土木簡の保存処理」(財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』第16号)でも触れられているが、木簡については、出土後速やかな釈文作成・実測の後保存処理が望まれる。本木簡については出土後5年を経て保存処理(その間は定期的な水替えと低温保存室による保管がなされていた)となったが、表面の墨書については一部判読が困難となってしまっている。また、保存処理により当初は判読できなかった墨痕が浮かび上がる可能性が高いことも付記しておく。
- ※2 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2006『畝田西遺跡群V』[同VI]
- ※3 和田龍介 1999『畝田・寺中遺跡第一号木簡覚書』(財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』第4号)
- ※4 松尾充晶 2006『2. 出土絵馬の評価』(鳥根県教育委員会 2006『青木遺跡Ⅱ(弥生～平安時代編)』第3分冊(奈良・平安時代))

畝田・寺中遺跡ほか2遺跡（畝田西遺跡群）の 古代「方形溝」について

浜崎 悟司

ここに紹介するのは当センターが平成13年度に実施した標記遺跡T区の発掘調査で見つかった溝状遺構SD31とSD34である。両溝はともに8世紀後半に埋没したとみられるもので一連の溝—「方形溝」として既に報告されている（文献1）。この遺構は「方形溝」とはいうものの、実際には南辺に溝が検出されていないため、「コ」字状プランを呈している。弥生時代～古墳時代の集落遺跡においてこの種の「方形溝」が検出された場合、大壁づくりの平地式建物と考える場合が多いと思う。弥生時代～古墳時代の当地において、こうした「壁立式平地住居」（文献3）はかなり一般的に存在する。しかしこの「方形溝」がつくられた8世紀後半まで降る例は乏しいのではないだろうか。少なくとも畝田・寺中遺跡の古代の遺構としては「方形溝」はほぼ単独例であろう。加えて、南辺に溝が廻らない状態であることも、報告書でこの遺構を「建物」として記述することを躊躇させたのではないかと思う。

この遺構の性格については、報告書の刊行後に精細な検討をこの遺跡に加えた文献2においてすら取上げるところとはならず、特に検討されることもなく今日に至っているのではないかと思う。最近になって私はこの遺構の理解に際して参考になるかもしれないと思える資料に気づいたので紹介してみたい。

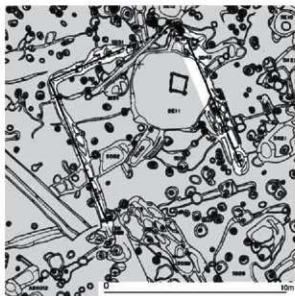


図1 畝田・寺中遺跡の「方形溝」



図2 古代の「私堂」（文献4による）

図2は文献4の表紙を飾るイラストで、『粉河寺縁起』の前半部分に繰り返し描かれている同寺創建時の堂の姿に基づくものである。描画年代が降る『縁起』の堂が創建時の実際の姿をどれほど忠実に表したのかを判断する能力は私には無い。ただ図2についての事務局コメント（同書174頁左段中程）は、これに類した建築遺構の西日本の古代集落内における存否の解明に期待を寄せているもののように受け取れる。つまり、図2の下部構造に類似した遺構が古代集落内に存在するのであれば、

それを積極的に「仏堂」として認定していこうとする動きが日本考古学界(少なくともその主要な一部)にはあるということだろうと思う。

自分が勝手に感じ取っただけのことかもしれない「動き」に「迎合」する訳では決してないが、図1「方形溝」と図2の堂壁底部に想定される遺構との類似については、明らかだと私には感じられる。「方形溝」遺構は一辺を大壁構造に作らない平地式建物と考えられよう。

ところで『縁起』の粉河寺は和歌山県(旧紀伊国)に所在するが、紀伊と加賀とは間に都—平城京・長岡京・平安京—を挟んだ正反対の方角に位置している。このことから、たとえ『縁起』の堂が8世紀後半の彼の地の堂を忠実に表現していると認めるにしても、大勢として紀伊と加賀の資料には余り接点が無いはず、つまりこの遺構も偶然似ているようにみえるだけだろうと考える向きがあるかもしれない。しかしながら、1回限りの貫入的な「方形溝」の導入といったことが仮に事の実態であったとすれば、畝田・寺中遺跡についてはその間の事情を伝える文献史料が既に知られているように思えるのである。

考古資料の検討が我々の本務とはいえ、出土文字資料は古代の遺跡を考える上で魅力に富む。特に畝田・寺中遺跡の場合、歴史史料としても評価が高い『日本霊異記』所収の一説話(下巻第16縁)の舞台でもある。俄か勉強ながら私も文献5などにより知識を得て、この「方形溝」に関連して以下のように考えてみた。

- ① 8世紀後半のこの「方形溝」は形状や方位指向性から建物遺構の可能性がある。
- ② 建物遺構とすれば「壁立式平地住居」の類であろう。
- ③ ②の古代例は希少とみられる。また「方形溝」の特徴は「コ」字状のプランに求められる。
- ④ ③が発見された畝田・寺中遺跡は『日本霊異記』下16縁所載の畝田村の一部であった。
- ⑤ 『日本霊異記』下16縁によれば、西暦770年頃に横江臣が当地で仏事を行った。
- ⑥ ⑤の仏事を差配したのは紀伊国名草郡出身の私度僧である寂林であった。
- ⑦ 寂林と『日本霊異記』の編者景戒とは、本貫地を近くする同業の同時代人であった。
- ⑧ 『粉河寺縁起』に描かれた同寺の創建堂は770年頃に「庵」として紀伊国那賀郡に建てられた。
- ⑨ ⑧の地下部分が発掘調査されたとすれば、②③と近い形状の遺構になると想定される。
- ⑩ ⑦の両者(特に寂林)の脳裡にあった「仏堂」のモデルは郷里(隣郡)のものであった。
- ⑪ ⑩に際して、「堂」的な施設が設けられた可能性がある。
- ⑫ ⑪の場合、⑩である⑥が④に③を造らせたことが考えられる。

急遽したための短文のため意を尽くせなかったが全く自信がないが、論点についてはおおよそ提示できたと思う。何時か粗稿を改める機会が訪れることがあれば幸いである。「方形溝」遺構の理解、「紀伊コネクション」の存否といった点について、各方面から御意見をいただくことができれば、と思っている。

参考文献

- (1) (財)石川県埋蔵文化財センター 2005「畝田西遺跡群V」
- (2) 出越茂和 2010 「北加賀の港湾関連遺跡と出土資料」(『資料学』研究会編「資料学の方法を探る(9)」)
- (3) 宮本長二郎 2005 「弥生時代の建築」(奈文研編「日本の考古学 上巻」)
- (4) 奈文研編 2006 「在地社会と仏教」
- (5) 吉田一彦 2006 「民衆の古代史」

石川県埋蔵文化財情報
第 26 号

発行日 2011 (平成23) 年9月30日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 福川印刷株式会社

© 石川県埋蔵文化財センター

